

安藤優一郎著「新島八重の維新」青春新書、青春出版社、2012 年 6 月 15 日刊を読む

1. 同志社大学創立者新島襄の妻新島八重の評判は、当時よりあまり芳しいものではなかった。襄がそう望んだこととはいえ、人前で夫の名前を呼び捨てにする。夫よりも先に人力車に乗る。和服であるのに帽子を被って靴を履くなどの言動が反発を買い、周囲からは激しい批判が浴びせられた。いきおい悪妻と罵られたが、そんな八重を襄は篤く信頼した。
2. なぜ、八重はそういう生き方を選んだのか。江戸時代以来の伝統的な慣習に拘束され家庭内に閉じ込められていた女性たちに対し、西洋社会を模範として社会に進出していくことを強く望んだからだ。そのため、いかなる批判を浴びようと、自ら率先して範を垂れたのである。
3. それは襄との共同作業だったが、その死後は、日本赤十字社に入社して従軍看護婦となり、日本赤十字社篤志看護婦人会の一員としても活動する。その一連の活動を明治政府も高く評価し、民間女性でははじめての宝冠章を受章している。
4. 同志社の創立期を支えたこともさることながら、八重の歴史的役割とは明治維新後の新時代において、女性の社会進出を身をもって示したことに何よりも求められるのである。
5. そんな生きざまについて襄は八重と婚約した際、アメリカでの生活を支えてくれたハーディー夫人への手紙のなかで、八重を「ハンサム」つまり美しい行いをする人と紹介している。第五章でも触れたとおり、「あることをなすのが自分の務めだと確信すると、もう誰をも恐れません」と評したわけだが、その凛々しく潔い生き方を指して、「ハンサム」と表現したのだ。言い換えれば、男勝りという表現になる。
6. そんなハンサム・ウーマンとしての生き方を語るうえで、鶴ヶ城籠城戦に象徴される生まれ育った会津での日々は避けて通れない。最後に、その点について若干触れ、結びに代えたい。
7. 新島八重としての人生もさることながら、会津時代の山本(川崎)八重の人生に注目した。襄と再婚して新島八重となり、会津から京都に移り住んでも、その心はずっと会津に向けられていた。戊辰戦争で敗北して故郷を追われた会津藩士への鎮魂の思い、八重自身その一人である会津人としての意地がそこにはあった。
8. 会津での日々で培われた折れない心が、ハンサム・ウーマンとしての人格を形成していったのである。そして、新天地の京都で襄と知り合い、同志社の創立を支える。
9. 同志社大学創立者の妻として語られがちな八重の生涯に新たな光をあてることで、明治維新を境に歴史の敗者に転落した者たちのハンサムな生きざまが浮かび上ってくる。そんな知られざる歴史を、山本八重そして新島八重の生き方は教えてくれるのである。

[コメント]

NHK の大河ドラマ「八重の桜」では、幕末から明治維新にかけての会津藩のおかれた状況がていねいこの上なく描写されている。そのおかげで、なぜ八重が京都に行き新島襄と第二の人生を共にしたのかがよく理解できる。本書は会津の歴史と同志社の歴史を理解する上でとても役に立った。

－ 2013 年 4 月 24 日 林 明夫記 －